

明がほしい、成るべく簡単で、実用的なものが望ましい。

(c) 両氏論文中の第3図、第6図第7図において示された5%で有意な範囲とはおそらく

$\delta\alpha = \bar{\alpha} \pm S\sqrt{(n/n-1)F}$  または  $\delta\alpha = \bar{\alpha} \pm 2S$  によって作られたものであるが、それが雨量が両方とも0という原点から出発していることの説明、普通は相関図の回帰直線のまわりに一定の幅  $\sigma_y^2(1-r^2) = S_y^2$  の平方根の範囲であるのだが、それとのちがいの説明、および、効果逆効果の領域の意味とくに逆効果の物理的意味の検討の必要性はどうか。

といった3つの点についての詳しい解説が望まれるのではないかと思われる。

勿論、最初に両氏が「はしがき」で断られたように、今迄の判定結果からごく概略を編集したものであるためであろうが、一寸判断に苦しむような点、誤解される恐れのある疑問点はたとえ紙数を多少超過しても、詳しく述べて頂きたいと考える。

#### § 4. あとがき (将来の問題)

以上のべたことから当然派生してくる将来の問題は

(i) 日、半旬位の降水量は一般に正規分布とは到底認

められないから、これを成るべく簡単で能率よい手づきで正規化すること。すなわちたとえば  $\Gamma$  分布 (その特別な場合が指数分布) を正規化する簡略法

(ii) 2地点雨量の比較に都合のよい根拠あるしかも簡単な  $Parameter$  は  $\alpha = (x-y)/(x+y)$  もその一つであろうが、ほかにはないか、(たとえば相関比、関連係数など)

(iii) 雨量の局地性、強雨境界線の判定方法。

(iv) 判別函数法のようなやり方で、統計的にこれは人工降雨による増量、これは自然降雨による量、といった分類法はつくりえないか。(たとえば、E. Paulson の判別統計量の導入)

そのほか種々挙げられる。これらについては機会を新たににしてしらべてみたいと考えている。

敢て卑見をのべ、内海、佐藤両氏およびこの問題に関心をもたれる方々の御批判、御意見を頂きたい。

なお、「天気」誌上でも、種々の問題についての討論や、意見の交換がこれから盛んになるよう編集者の方々も考慮されているようですので、このような卑見が、その一助にでもなれば幸いである。最後に御一読頂いた小河原正已先生に御礼申し上げます。(昭和31年2月29日

#### 書 評

「日本の気象」—毎日ライブラリー

高橋浩一郎編

毎日新聞社刊. B 6 289頁 300円

「新しい気象読本」

淵 秀 隆 著

防災科学普及協会 } 刊 A 5 195頁 350円  
気象協会 }

今年に入って気象関係の啓蒙書として推せんされるような本が続々現われたことは、われわれ気象学を専攻するものにとって悦ばしいかぎりである。ここにあげた2冊はあらためて評者があげつらうまでもなく、好箇の啓蒙書として諸家によって推せんされている。

啓蒙書のスタイルにはいろいろあるが、この2冊はその行き方を非常に異にしている。「日本の気象」は言わば日常われわれが体験する四季の気象を生活に結びつけて読き起し読き去っているのに対して、「新しい気象読本」は、気象学を学ぶため、あるいは生活に密接に関係する気象現象を理解するための基礎的な知識をまず与えて、その後四季の気象と災害を中心として読き、天気図の見方、気象庁から発表される注意報、警報の種類、天気予報放送のスケジュール等を述べて昭和年間の災害年表を添えて終っている。前者は生活気象あるいは応用気象に重点を置き、広い教養的色彩の濃いものであり、おそらく電車の中でも気楽に読めるような書き方である。後者は最新の気象測器 (ラジオ、ゾンデ、レーダーそ

の他) や見事な現象の写真を駆使して、従来の啓蒙書にない味を出しているが、教科書あるいは参考書的なものである。

以上両者の対蹠的な相異点をあげて来たが、「日本の気象」の内容は項目に分かれ、それぞれ最適任者と目される専門家によって筆がとられている。欲を言えばきりがながい、全体の編集がもっと行き届いて、項目間の表現のニュアンスの違いにまで手を入れて欲しかった。内容について若干問題となる箇所もある。例えば116頁洞爺丸台風の記事中、函館地方の天気が一時回復したのは台風眼の通過によるのだとの記述は誤である。最近の啓蒙書の中では群を抜くものとして推賞したい本書の、小さいながら影響する範囲の大きいことを考慮されて、早い機会に訂正されることを願って止まない。

「新しい気象読本」の著者は申すまでもなく永年気象台に奉職しており航空気象、高層気象の権威である。気象学の基礎知識が数式を使わないうで理解しやすいように説かれており、災害をひき起す気象現象の理解を助けるように書いている。魅力は新しい写真と豊富な図版である。これらが一体となって読者の理解を助けている。特に著者の専門である高層気象の章は、内容の新しき、豊富さから言って、他の追隨を許さないものである。入門書、参考書としての本書の価値は高く評価されるべきである。ただ、図版に見おとりのするものが多く全体の編集がヤボった感じがすると、値段がチョットはるのが遺憾である。(奥田稔)